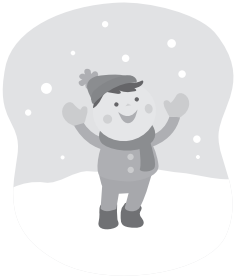
校長会報

第138号

宇都宮市立戸祭小学校
栃木県小学校長会事務局

発行責任者
髙橋正彦

印刷所
(有)正栄社印刷所



主張　新学習指導要領の移行期を迎えて

栃木県小学校長会副会長　大島　秀雄

来年度はいよいよ新学習指導要領の移行期に入ります。移行期に何をなすべきかを学び、各校があるいは各市町ごとに協議検討がなされたことと思います。「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、学校と家庭・地域が連携・協働しながら、教育活動や学校経営などを改善し、新しい時代を創造できる資質や能力を育むことがポイントとなります。特に、小学校では、新たな教科として「外国語」、授業の転換が求められている「特別の教科道徳」など、対応しなければならない課題が山積しています。私も校長としてどのように対応していくか、苦慮していました。

そのようなとき、十月に全連小の佐賀大会に参加する機会を得ました。分科会で、全国から集まった校長先生方のお話をお聞きしました。あっという間の出来事のように感じる貴重な興味深い時間となりました。校長としてのものの見方や考え方の幅を広げるよい刺激となりました。また、佐賀県は幕末維新の際に先駆的役割を果たしてきました。その佐賀県ゆかりの三名の方によるシンポジウムでは「未来を創る子どもたちに～あたたかくつよくしなやかに～」のテーマからメッセージが語られました。その道のプロのお話を聞きながら、幼少期の豊かな経験や出会いが人間としての土台をつくり、新しいものに挑むエネルギーや知恵となって結実することを改めて強く確信いたしました。

栃木県にもこれまでの先輩方が築いてきた実践の積み重ねがあります。不易の部分も大切にしながら、地域に根ざした教育を自信をもって実践し、新学習指導要領へしなやかに対応し、具現化していきたいものと考えています。

（佐野市立犬伏小学校）

主張　次期学習指導要領と働き方改革

栃木県小学校長会副会長　広木　俊夫

新学習指導要領は告示後、二〇一八年から移行期間、二〇二〇年から小学校、二〇二一年から中学校で全面実施となる。その中には、

・小学校五・六年で外国語が正式教科に

・プログラミング教育の必修化

が、含まれている。これからの社会で子どもたちに求められる資質・能力という視点で、確かに必要であろう。本校でもその準備が着々と進められている。

一方で、教職員の長時間労働が問題になっている。二〇一六年に実施された文部科学省の教員勤務実態調査では、勤務時間が週六十時間以上だった教職員は、小学校で三十三・五％、中学校では五十七・七％に達した。勤務時間が週六十時間というのは、おおよそ月八十時間の残業に換算できる。厚生労働省は、過労死の労災認定基準として心疾患や脳疾患が発症する前の一か月間に百時間以上、または二～六か月間に毎月八十時間以上の残業があった場合に、業務と発症との関係性が強いとしている。この実態をうけ、教職員の働き方を真剣に改革していかなければならない。

本市では、十月から教職員の出勤時刻と退勤時刻を記録することになった。今まで、それをしてこなかったことが異常だと思える。また、朝早くから夜遅くまでの長時間労働を美化する雰囲気がまだある。

教育という仕事は子どもたちの未来を作り出す大切な仕事である。また、子どもたちに身に付けさせたい資質・能力も増加している。それを疲れ切った教職員がおこなうことができるだろうか。学校をスリム化する、チーム学校等教職員の働き方改革の方法が考えられている。私たち教職員は、新学習指導要領の目的を達成できるよう努力するとともに、自分たちの働き方を改善しようとすることも大切にしたい。

（下野市立緑小学校）

栃木県小学校長会中央研究大会

大会主題「新しい知を生かし豊かな心をもった子どもの育成を目指す学校経営の推進」

研修部長　吉成　隆志

平成二十九年度の中央研究大会は七月十三日（木）、宇都宮市文化会館で開催された。

一　開会

○開会の言葉　渡部吉晴副会長

○会長あいさつ　髙橋正彦会長

○来賓あいさつ　池田聖県教育次長

二　研究発表

◇研究テーマ

「これからの社会を生き抜くための学力を育む教育課程の工夫−アクティブラーニングの視点からの授業改善−」

◇発表者

下野市立古山小学校　阿嶋敬一校長

◇発表内容（一部略）

１　現状と問題点

子どもたちに求められるのは、様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながらどのように人生をよりよいものにしていくかを考え、主体的に学び続けて自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくことである。

そこで、学校では変化の激しい社会を生き抜くために必要な力である「確かな学力」を確実に子どもたちに育むことが求められている。特に主体的・対話的で深い学びの実現について推進を図っていく必要がある。

２　研究の概要

①Ａ小学校の実践例

（「学びの質を高め、その深まりを重視する授業の創造」に取り組む）

○「アクティブ・ラーニング」を追究し、児童が学びの手応えを感じる授業

・主体的・協働的で、能動的な学びの導入

・プロセス（学びの過程）を大事にする授業展開

・対話的な学びの重視

・学びのストーリーを生み出す意欲、態度の育成

・安心して学べる教室づくり

○プロフェッショナルとしての授業力の向上

・教師の学び合う関係を築く。

・年間最低一人一回以上は授業公開を目指す。

・子どもの学びの姿を中心に話し合う。

・授業検討会のコーディネートと進行ができるようにする。

・教育専門家を招き、質的向上を図る。

○「育成すべき資質・能力」に関する研究と実践

・知っていること、できることをどう使うか。

・どのように社会、世界と関わりより良い人生を送るか。

②Ｂ小学校の実践例

（「教師力向上を通して学力向上を目指す教育課程の工夫」に取り組む）

○基礎基本の確実な習得

・朝読・家読・読み聞かせの全校実施

・自学の時間：毎日５校時前の10分間

・全校生百マス計算大会

○主体的な学ぶ態度の育成

・学業指導の充実

・基本話型を生かした話合い活動の充実

・個別学習指導の実施

・学習アンケートの実施

○教師の指導力の向上

・学校課題研究：一人一授業、チームによる指導案検討、模擬授業

・「学習のきまり」の見直し

・ノート指導等の共通実践

・全国学力学習状況調査ととちぎっ子学習状況調査の結果分析と活用

○学習習慣の確立と家庭との連携

・「家庭学習４か条」

・授業参観の工夫：参加型授業、親子学び合い授業

③Ｃ小学校の実践事例

（「主体的・協働的・対話的に学ぶ児童の育成をめざして−サイエンスコミュニケーションやプログラミング教育を通して−」）

○学び合う授業（考えを広げ深める授業）

・主体的に取り組める問題

・対話的に取り組める学習

・協働的に取り組める学習

○知識・技能を活用する力

・体験活動を通した各自なりの理解や思考の仕方

・言葉、図、身体表現など多様な表現活動

・文章表現のスキルを高める活動や書く活動で表現する場面の設定

○考えを言葉で伝え合う力（サイエンスコミュニケーション）

・説明力向上のための教科特有の用語の提示

・思考を促す論理的に導く言葉（接続詞）の提示

・知識や語彙力を高めるための読書

○伝え合うためのツール

・考えを出し、比べ、整理し、深める思考ツール

・ＩＣＴ機器を積極的に利用し活用する経験と技能

・問題解決のために見通しをもって取り組む学習方法（プログラミング教育）

○学び合う集団づくり

・目標をやりとげる力

・話をつなげる力

・友達を支える力

・安心を生み出す力

・きまりを守る力

３　まとめと課題

①成果

・市内の小学校が現在求められている課題へ的確かつ積極的に取り組み、その実践事例を共有することによって各校の「確かな学力」と市全体の学力が向上した。

②課題

・これからの社会を生き抜くための学力をさらに育むためには、学習指導要領改訂の趣旨を理解するとともに、授業改善等について各学校で研究を推進し、また校長会で協働的に研修を深め、共通実践していく必要がある。

４　提言

新学習指導要領の趣旨を活かした教育課程の編成・実施・評価・改善を推進するためには、各学校の児童や地域の実態をもとに、これからの

社会を生き抜く力を明確にし、校長が教育観を更新しながら指導性とリーダーシップを発揮することが重要である。

三　講演会

○講師紹介

大島秀雄副会長

◇演題

「こころの声が言葉になる―院内学級の子どもたちが教えてくれた大切なこと―」

◇講師　副島賢和先生

昭和大学大学院保健医療学研究科准教授

◇講演内容

□はじめに

私は入院している子どもたちが学ぶ「さいかち学級」の担任をしている。「さいかち学級」の子どもたちを御自分の学級や学校や地域のことに置き換えながら聞いてほしい。

□院内学級にかかわるきっかけ

文科省の不登校に関する追跡調査によると、そのきっかけは「病気をしてから」と答えた割合が約15％もあった。その子たちに今まで私は、何もしてあげられなかった。病気の子の教育をしたいなと、私が思ったきっかけである。

□当事者意識について

病気を抱えた子どもたちは、家族に迷惑をかけている自分がいていいのかと思っている子が多い。そんな子には、そういった経験があるからこそ、人の気持ちが分かるようになったのかもしれないと教えてあげる。それを当事者意識とか思いやりと言うが、行動へと移すことは難しいので、①視点を変えてみる　②ちょっと想像してみる　③感情を大切にするという三つの視点から、教師として子どもたちに当事者意識を育てていきたい。

□自尊感情について

肯定的な自尊感情には、二つある。『自分がそのままでいい』という気持ちと、『自分はできる・分かる』という気持ちである。この双方が支え合っている状態が望ましい。しかし、そうでない状態にある子どもたちは「どうせ」という言葉を使う。そんな子どもたちが増えている。

□感情を豊かにしたい

私は子どもたちの感情を大切に考える。特に怒りの感情だ。もちろん悲しい感情や悔しい感情も、どんな感情でも大事にしてほしいし、どんな感情でも持ってよい。ただ、それを人に正しく伝える仕方を子どもたちに見せなくてはならない。

□一人一人を大切に

二年生の子が六年生の男の子に言った。「お兄ちゃん大丈夫だよ。さいかち学級には失敗がないから。」

その六年生の男の子が作った詩がある。

『僕は幸せ。おうちにいられれば幸せ。空が青ければ幸せ。みんなが幸せに思わないことでも幸せに思えるから、僕は幸せ。ぼくのまわりには幸せがいっぱいあるんだよ。』

□最後に

誰かの辛さや苦しさを受け止めるためには、皆さんの中にある苦しさや辛さを渡せる仲間をつくっていただきたい。そうすることによって病気による困難をもった子どもたちを支えられるのであれば、私もその仲間の一人に加えていただければと思う。

◇講演概要については、平成三十年三月発行の『小学校長研修記録五十七』に掲載

○謝辞

広木俊夫副会長

○閉会の言葉

渡部吉晴副会長

栃の葉

「学びの環境の更なる充実へ～とちぎっ子学びの三つ星プラン～について」

栃木県教育委員会

栃木県教育委員会では、教育環境の整備に尽力しておりますが、今回は、とちぎっ子学びの三つ星プランについて御説明します。

一つ目の星は、「いきいきプロジェクト」です。本県では全国に先駆けて平成十五年度から三十五人以下学級を実施し、これまでに義務標準法により三十五人以下学級となっている小学校第一学年に加え、小学校第二学年及び中学校全学年について、本県独自の取組により三十五人以下学級を実現して参りました。更に今年度からは、小学校第三学年にも三十五人以下学級を拡大しております。このプロジェクトにより、子どもたちに対するきめ細かな指導がより充実すると考えております。

二つ目の星は「スマイルプロジェクト」です。このプロジェクトは、非常勤講師配置の充実を目的に、平成二十四年度から実施しているものです。今年度は、「小学校低学年において必要度の高い学級」や「特別支援学級を含む指導困難な小中学校」に対して非常勤講師二百二十人を配置しております。非常勤講師を配置することで、複数の教員による指導や個に応じた指導が可能になる環境が整うと考えております。

三つ目の星となる「かがやきプロジェクト」は、今年度からの新規事業で、加配を活用した「学力向上推進リーダー」の配置と「学力向上実践加配」の配置を行っております。「学力向上推進リーダー」の配置は、小学校の国語と算数の指導に優れた教員を学力向上推進リーダーとして認定し、複数校を兼務しながら、当該校教員への助言等を通して学力向上を目指すものです。また、昨年まで「指導方法工夫改善加配」として配置していた加配を、「学力向上実践加配」として配置し、これまでよりも実効性のある加配活用計画の立案と、実施状況の自校評価並びに教育委員会評価を行います。この取組により、子どもたちの学力向上につながる教育環境が一層整備されると考えております。

これらの三つの星（プロジェクト）を合わせて、「学びの環境の更なる充実へ～とちぎっ子学びの三つ星プラン～」としております。校長先生方におかれましては、本事業の趣旨を御理解いただくと共に、各校における十分な活用をお願いいたします。

地区だより

「新学習指導要領の小学校外国語活動・外国語科の実施に向けて」と題して講話をいただいた。

二月には、班別研修の集大成として各班の研究発表を予定している。

●●●●〔宇都宮地区〕●●●●

本地区では、研究主題を「新しい知を活かし、豊かな心をもった子どもの育成を目指す学校経営の推進」として研究を進めた。

市の「児童生徒と向き合う時間の充実に向けたアクションプラン」と連動した、学校経営、教育課程、校務運営規定の各標準化プラン案の検討を始め、十テーマに沿った班別研修を行った。各学校の取組を紹介しあい協議する中で、成果と課題を共有し、新たな提案をすることができた。

また、十一月には、市教育センターで上三川地区校長会との合同研修会を実施し、信州大学学術研究院教育学系教授酒井英樹氏から

●●●●〔上三川地区〕●●●●

本地区では、研究主題を「確かな学力の育成を目指す特色ある教育活動の推進」として研究を進めてきた。今年度は各学校が行っている学力向上の取り組みについて、特に校長のリーダーシップの視点から実践研究を行った。各校の取り組みに共通するのは「基礎基本の充実」「教師の力量・指導力の向上」「家庭学習のさせ方・工夫・定着」の三つの観点である。今後はこうした方策を学校の実情に合わせてどう工夫し生かしていくかを考えたい。

●●●●〔上都賀地区〕●●●●

本地区では、研究主題を「新しい知を活かし、豊かな心をもった子どもの育成を目指す学校経営の推進」とし、鹿沼市・日光市の二市で連携して研修を推進した。

鹿沼市では、研究テーマを「これからの社会を担う人材の育成を見据えた明確なビジョンの策定と学校経営の推進」、日光市は「校長としての資質の向上と様々な課題への対応」と定めて研修を進め、年二回の全体研修会を通して学校経営の充実に資することができた。

●●●●〔芳賀地区〕●●●●

本地区では、研究主題を「確かな学びを育む学校経営の推進」として研究を進めてきた。新学習指導要領が平成二十九年三月に告示され、現在、各学校は、その移行措置を含め、全面実施に向けての準備を確実に行っていくことが求められている。主体的・対話的で深い学び、社会に開かれた教育課程、カリキュラムマネジメントの確立、英語・道徳の教科化等、大きな変革が要求されている。

九月に開催された研修会では、全体研修及び班別研修での意見交換を通して見識を高めてきた。具体的には、校長に求められる指導性、実践例、そして現段階における成果と課題を持ち寄り、研修を深めた。今後、二月に紀要としてまとめ、発表を行い、自校化を図っていく予定である。

●●●●〔下都賀地区〕●●●●

本地区では、研究主題を関ブロ神奈川大会の提案研究主題と同様「地域や関係機関との連携を図る安全教育・防災教育の推進」とし、人的、物的環境を生かし、様々な実践を通し、児童の安全を守るために、組織的研究を進めた。

また、「学校の活性化を図るための人材育成の在り方」と題し、前野木町教育長中野晴永先生から、示唆に富む貴重な御講話をいただき、校長としての重責を再確認し合った。

●●●●〔下野地区〕●●●●

本地区では研究主題を「新しい知を活かし、豊かな心をもった子どもの育成を目指す学校経営の推進」とし、各校の実態に即して、また市全体の教育力向上につながるように研究を推進してきた。

六月には、県学力推進室長の齊藤正幸先生をお招きし、「栃木県の学力向上施策を生かした学力向上への取り組みについて」と題して講話をいただき、大変参考となった。

十一月には、各学校の実践発表を行い、各学校の取組について、情報交換をすることができ、有意義であった。

●●●●〔小山地区〕●●●●●

本地区では、二班に分かれ、A班は「教職員の資質、能力の向上を目指した学校経営の推進～授業力の向上に校長としてどう関わるか～」、B班は「教職員の世代交代を意識した人材育成の在り方～主としてキャリア段階Ⅰ・Ⅱを中心に～」という研究主題で研修を行い、一月の班別研究発表会で成果を確認した。また、小中合同で、教育講話会（五月）、学校経営実践発表（七月・二月）、その他四つの専門部による研修等の事業を行った。

●●●●〔栃木地区〕●●●●●

本市小学校長会では、研究主題を「新しい知を活かし、豊かな心をもった子どもの育成を目指す学校経営の推進～『栃木市コミュニティースクール』の導入と学校経営～」とし、「学校運営協議会の導入」「学校運営協議会の協議内容」「学校運営協議会と学校評価」「学校運営協議会とアシストネット」の視点からグループ別協議を進めた。それぞれの学校の特色ある学校運営協議会と学校経営の在り方を共有することができ、有意義な研修となった。

十一月の校長会教育講演会では、中教審専門委員の佐藤晴雄様をお招きして、「地域とともにある学校づくり実現のために」と題し講話をいただいた。本市の学校運営協議会の方向性を探る上で大変参考になった。

●●●●〔塩谷地区〕●●●●●

本地区では研究主題を「生きる力を育み子どもの明日を拓く学校経営の推進」と設定し、全体と市町別とに分けて研修を進めた。全体研修は二回行い、第一回は、宇都宮大学・原田浩司准教授から「特別活動と校長の役割」と題し、また、第二回は塩谷南那須教育事務所・関一浩副主幹から「新学習指導要領における特別の教科道徳」と題し、それぞれお話を伺った。

市町別研修では、各市町が地域や学校の実態や課題に応じて実践的に研究を進め、研究成果を報告し合った。

●●●●〔那須地区〕●●●●●

本地区では研究主題を「新しい知を活かし、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」として、平成二十七年度からの三年間、市町ごとに研究を推進してきた。研究テーマは、大田原市は「道徳教育を核とする心の教育の充実」、那須町は「地域の力を教育に生かす組織の編成」、那須塩原市は「小中一貫教育を通しての人づくり教育の推進」である。

十一月の小中合同全体研修会では各市町の研究発表の後、活発な協議が行われ研究の成果が確認された。

●●●●〔南那須地区〕●●●●

「命を守る防災教育・安全教育の推進と校長の役割～自分で考え，自分で身を守ることができる児童の育成を目指して～」を研究主題として、年間四回の研修会、各学校での実践と地区内での共有化を軸に研究を進めてきた。十一月の研究大会では、南那須広域消防本部危機管理担当西宮一美先生から、「学校における防災対策と校長の役割」について、具体的な事例をもとに御教示いただき、研究の一層の推進につながった。

●●●●〔佐野地区〕●●●●●

本地区では「新しい知を活かし、豊かな心をもった子どもの育成を目指す学校経営の推進」を基本目標として、「創意ある教育課程の実施」「豊かな情操と道徳心を養う教育の推進」「教職員の指導力の向上と人材育成」について班別研修を行ってきた。各学校の実践例や事例等を通して、研究を深めるとともに、有意義な情報を共有できる機会となった。

また、「子どもの発育・発達と身体活動の関係」と題して、講話をもとに全体研修を実施した。

●●●●〔足利地区〕●●●●●

「学校力を高め、豊かな心をもつ子供の育成を目指す学校経営」という研究主題のもと、「学力向上のためのカリキュラムマネジメント」「特別の教科道徳に対応した評価の在り方」の二つの視点から研究を深めた。

また、年間四回の小中学校合同研修会を行っている。「人権教育研究学校の取組に学ぶ」「二十一世紀を生き抜くために必要な学力を保障する学習指導の在り方」の講演会なども実施し、校長自らの資質の向上に努めてきた。

豊かな心をもち　輝いて生きる子どもの育成を目指す学校経営

地域とともにある学校

壬生町立藤井小学校　田中　利文

一　はじめに

本地域は、姿川と黒川に挟まれた丘陵地の純農村地帯です。かんぴょう生産発祥の地でもあります。近くには県内最大級前方後円墳「我妻古墳」があり、太古の昔から開けた地域です。

本校は、明治六年開校、今年で百四十四周年の伝統校で小規模校です。

地域なくして本校の教育は成り立ちません。地域にとっても本校は、昔も今も「おらがムラの学校」です。

二　縦の連携

異校種間交流では、近隣の保・小・中・高の学校と連携しています。特に、小高交流では、壬生高生にペーパークラフトや手話、夏休みの宿題を教えてもらったり、運動会の準備や当日の運営係を手伝ってもらったりしています。小学生にとって高校生は年齢の近い、よきモデルとなっています。また、異学年交流では、縦割り班で給食、清掃、全校遠足などを実施し、仲間づくりを体験しています。全校遠足では、借上げバス一台でひたち海浜公園や東武動物公園などへ行き、班別活動をしています。

三　横の連携

合同運動会では、六自治会と協賛で高齢者種目や自治会種目なども実施しています。親子三代リレーや保存会の生演奏による「かんぴょう音頭」もあります。

また、アグリ体験では、農家から借りた学校教田で田植えや稲刈りを、学校農園では好きな野菜作りをしています。特に五年生は総合的な学習の時間で、地域の農家やかんぴょう販売会社の御支援を得ながら、特産物のかんぴょうの研究をしています。ユウガオの苗を植え、水やりから収穫、かんぴょう剥きから製品加工、「ふくべ細工」作りと、一年間を通して、かんぴょうについて追究しています。

四　おわりに

今後とも、地域という揺りかごに支えられながら、地域に根差した教育で、地域の宝である子どもたちを手塩に掛けながら、一人一人を大切に育てていきたいと思っています。

かんぴょう剥きの様子

地域の教育力を生かした教育活動の展開

那須町立学びの森小学校　石田　弘

本校は、平成二十八年度に統合した創立二年目の新しい学校である。児童数は、百二十三名の小規模校で、児童は純朴で明るく、作業等も真面目に行うことができる。また、保護者や地域住民の学校への関心は高く大変協力的である。

本校では、地域の教育力を生かした教育活動を特色ある学校づくりの中核としている。地域の教育力の活用の原動力になっているのは二名の地域教育コーディネーターである。学校側の希望にあった地域人材を探したり、地域行事協力の調整をしたり、学校と地域のパイプ役となっている。

以下が地域の教育力を生かした具体的な取り組みの内容である。

・授業への支援（家庭科、音楽科などの技能教科を中心とした支援）

・学校行事への支援（陸上競技練習、スキー教室、七夕まつり、宿泊学習、田植えや稲刈り等での専門的な支援、校外学習などでの安全支援）

・敬老会や福祉協議会との連携（敬老会へ全校生参加や高齢者とのふれあい活動）

・その他の支援（農園活動支援、図書室経営及び読み聞かせ、サマースクール講師）

今年度は、「一緒に○○○に参加しませんか？」とメールで保護者や登録された地区の方に学校行事などの案内を始めた。これまでに校外学習、家庭科の調理、七夕の飾り付けなどの案内を実施し、のべ約三十名の参加があった。それにより教育活動への保護者や地域の方々の理解が深まった。また、社会教育主事を講師に地域連携の研修会を実施した。校長の考え、地域コーディネーターの思いをそれぞれ発表し、グループ協議も行った。その結果、異動してきた職員も地域連携について理解がなされ、同じ歩調で取り組んでいる。

今後は、持続可能な支援体制にするため学校へ行くのが楽しい、また行きたいと支援者が思うような、ウインウインの関係を築いていくことや、教職員やコーディネーターが変わっても支援の質を維持できるような体制やカリキュラムを推進していきたいと思っている。

田んぼでアート
地域おこしへの協力

特色ある学校づくり

「やさしくかしこくたくましい地域を愛する北小っ子」を育てる

高根沢町立北小学校　斎藤　智之

本校は児童数百七十四人、全学年単学級・特別支援学級二学級の小規模校です。昭和三十六年に旧熟田村立文挟小学校と旧高根沢村立中央小学校東高谷分校とが町村合併等を経て統合してできた、今年で創立五十六年となる学校でもあります。

学区は町北東部に位置し、北側をさくら市、東側を那須烏山市に接し、水田が広がる栃木県の穀倉地帯です。北側にはＪＲ烏山線と旧烏山街道が、南側には県道烏山バイパスとが学校を挟むように並行して走っています。

地域の方々は学校に協力的であり、特に児童の毎日の登下校の見守りを行っていただいているスクールガード活動には多くの方が参加しております。また、地元のシニアクラブの方々は、学校の池の清掃を始め、しめ縄づくり、餅つき等の伝統行事体験活動を、ＰＴＡ役員ＯＢの方は木工教室やスキー教室等を開催しております。また、冬の伝統行事として地区毎に「どんど焼き」が行われていますが、それを主として担っているのは地域の育成会です。このように、地域ぐるみで児童の成長を見守っている地域でもあります。

ＰＴＡ活動も盛んです。学年毎に行う親子ふれあい体験活動は、学年毎に特色ある体験活動を実施し、親子の絆を深める時間となっています。例年、一年生はレクリエーション・インストラクターの指導による「親子レク」、二年生は親子で歩いて地域内の施設や商店を訪ねて話を聞く「町探検」、三年生は公民館の自主講座講師による「絵手紙作り」、四年生は地元ＮＰＯ法人の指導による「マイ箸作り」、五年生は地域のシニアクラブ指導の「しめ縄作り」、六年生は消防署員から「救急救命法講習（心臓マッサージとＡＥＤの使い方）」を受けています。

現在、本校は二十八・二十九年度文部科学省・県教委・町教委から人権教育研究校に指定されています。人権アンケートの結果から伺える児童と保護者の実態は、児童は自己肯定感が低く、保護者は自分の感情で叱りがちという傾向が見られました。そこで、今回、本校が研究指定を受けたことを契機に、私たち教職員自身も人権意識・人権感覚の向上に努めるとともに、地域の教育力を生かしながら、児童の自己肯定感の向上と保護者の児童への関わり方が良い方向に向くことを願って、日々、教育活動に取り組んでいます。

5年親子ふれあい学習・しめ縄作り

地域とふれあい、心豊かな子どもを育てる

鹿沼市立菊沢西小学校　武田　淳子

本校は、周りを水田に囲まれたのどかな地域にあります。保護者や地域の方々に学校教育活動に御協力いただく機会が多く、「地域とふれ合い、心豊かな子どもを育てる」ことをモットーに、地域の方々と共におこなう活動を継続的に実施しています。

五月の運動会前には、子どもたちの祖父母をはじめ学区内のお年寄りの協力を得て全校除草をおこないます。縦割りのなかよし班にお年寄りに加わっていただき、子どもたちはみるみるきれいになる校庭にお年寄りの力のすばらしさを実感します。

夏休みの終わり頃には、今年で四年目になる「生き物調査」を実施。自治会の環境整備部の皆さんの御協力で、学校裏の用水路に生息している生き物を捕獲し、専門家の指導を受けて調査します。生き物が住み着きやすいようU字溝を水路に設置したり、土手の草刈りをしたりと、地域の方々は子どもたちのために準備をしておいてくださり、今年もカワニナ・どじょう・かに・カエル・三種のヤゴなど短時間のうちに様々な種類の生き物が見つかりました。

また、地域の福祉施設「希望の家」の皆さんとの交流も大切なものです。日頃はパンジーなどの花苗や椎茸栽培をしている方々が、低学年のサツマイモ栽培に力を貸してくださいます。特に今年はサツマイモの成長が著しく、ツルを引っ張ったり、一輪車で運んでくださったりと「希望の家」の皆さんの御協力のお陰で、大きな芋をたくさん収穫することができました。苗植の頃には、自分から話すことができなかった子どもたちが、一緒に話しながら楽しそうに芋掘りができたのも大収穫です。

今後も地域の自然や人々のすばらしさを、体験やふれ合い活動を通して学ぶことで、ふるさとを愛し、周りの人々との関わりを大切にできる心豊かな子どもたちを育てたいと考えています。

学習発表会でのふれ合いタイム

話題の広場

情報は対話から

宇都宮市立白沢小学校
武田　公男

何歳になっても「旅」は魅力的なものです。連休ともなれば、観光名所や旅客数を報じる記事やニュースが流れます。そんな中、鉄道車両ファンがじわじわと増え続けているように感じます。年齢層も幅広く、休日の車両見学会や乗車体験会は、家族連れやマニアで大盛況。一部では「乗り鉄」「撮り鉄」という言葉も生まれました。

本校には現在、時刻表を「読書」している児童が二名在籍しています。実際に乗車する機会は限られているものの、頭の中では全国の路線図をなぞって「旅」を続けています。客車の外観はもちろん、シートやドアの部分写真をかざすだけでも、すらすらとその列車名が口から出てきます。行き先をつぶやくと、宇都宮発の時間から丁寧懇切に教えてくれるほどです。

情報検索ツールが身近となり、即座に列車・バス乗り換え案内を提供してくれる社会となりました。見知らぬ都市であっても、地元の人に尋ねることなく、目的地に到着できます。

でも、本校児童と鉄道乗り換え話をしている時、情報検索ツールでは味わえない温かなわくわく感に包まれて、なぜかほっとします。

けん玉教育のススメ

栃木市立大平中央小学校
鈴木　廣志

あるテレビ番組でけん玉のもつ力について取り上げていて、とても興味をもった。「これだ」と思い立ち、校長室を「けん玉道場」と名付けて休み時間、子どもたちに開放している。初めは二人、三人。そのうち五人、十人と増えて、校長室は、連日満員御礼。

けん玉道場を開くと、いろいろな子どもたちの本音が聴けるのもまた楽しい。

「ぼくのお父さんはけん玉がすごくうまいよ。」ある母親から「家でもあざができるくらい練習しています。これくらい勉強もしてくれたら。」などの声も聞こえてきた。まだまだ、始まったばかりの道場で、もちろん有段者はゼロ。しかし、けん玉への情熱はかなりすごい。

日本けん玉協会の会長さんが「私たちが目指すのはけん玉道です。決してアクロバティックな技を目指しているではありません。礼儀を大切に『焦らず、慌てず、諦めず』です。」と話されていた。

本校は八か国の子どもたちが学ぶ国際色豊かな学校でもあり、けん玉を世界の子どもたちの共通語として、国際交流のツールにもしていけたらと思う。

事務局だより

事務局長　野中　政治

各地区からの要望や提案を総務部でまとめ、八月の県教委との教育懇談会で、重点を絞って協議しました。結果については、十月の理事研修会で報告しました。

今年度の大きな大会は、関ブロが神奈川大会、全連小が佐賀大会でした。関ブロ神奈川大会では、下野地区の阿嶋敬一先生・下都賀地区の大澤治亮先生・足利地区の鈴木一弘先生が、地区の研究成果を発表してくださいました。

中央研究大会の会場が、今年度は、宇都宮市文化会館でしたが、来年度から再び、県総合教育センターを会場として開催できる見込みになりました。

平成三十三年度に開催する関ブロ小学校長会研究協議会栃木大会に備えて、研究大会運営基金の支出の見直しを図りました。

今後も、事業の検討と執行の工夫・改善を進めています。会員の皆様の御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

年度末にあたり、健康に留意され、御活躍ください。

編集後記

「学校における働き方改革に係る緊急提言」が昨年八月に出されました。教員の多忙感については、以前から課題となっており、改善策も図られています。しかし、退勤時間は遅く、学級事務や校務分掌、そして児童生徒や保護者への対応などに追われているのが現実です。

今後、教職員の長時間勤務の看過できない実態の改善に向け「今できることは何か」を熟慮し、優秀な人材を確保するためにも、教員としてやりがいのある、職場環境を整えていく必要があると改めて考えさせられました。

御多用のところ、本号に玉稿をお寄せくださいました会員の皆様に、心より感謝申し上げます。

下野市立石橋北小学校
坂口　修